

びわこの 考湖学

—第2部—

60

「鎖明けて 月差し入れよ
浮御堂」

これは、元禄4(1691)年8月16日の観月会で、近江この縁が深い松尾芭蕉が詠んだ一句です。数年前の中秋の名月の頃、まさにこの様子を彷彿とさせる光景を目にすることができました。満月が対岸に聳える神宿る三上山の頂を超えて、浮御堂の真正面に昇っていきます。この瞬間、芭蕉も浮御堂の湖に面した東側の扉を開け、月光が御堂に差し込む神々しい情景を思い浮かべたのではないかと、と実感しました。

さて、浮御堂の正面はどちらかご存じですか？芭蕉の句からもわかるように、湖に面した方が正面になります。湖から見ると、比良・比叡の山並みを背景に、湖を望む浮御堂、と云う景観になります。では、浮御堂は何のために湖中に建てられたのでしょうか？

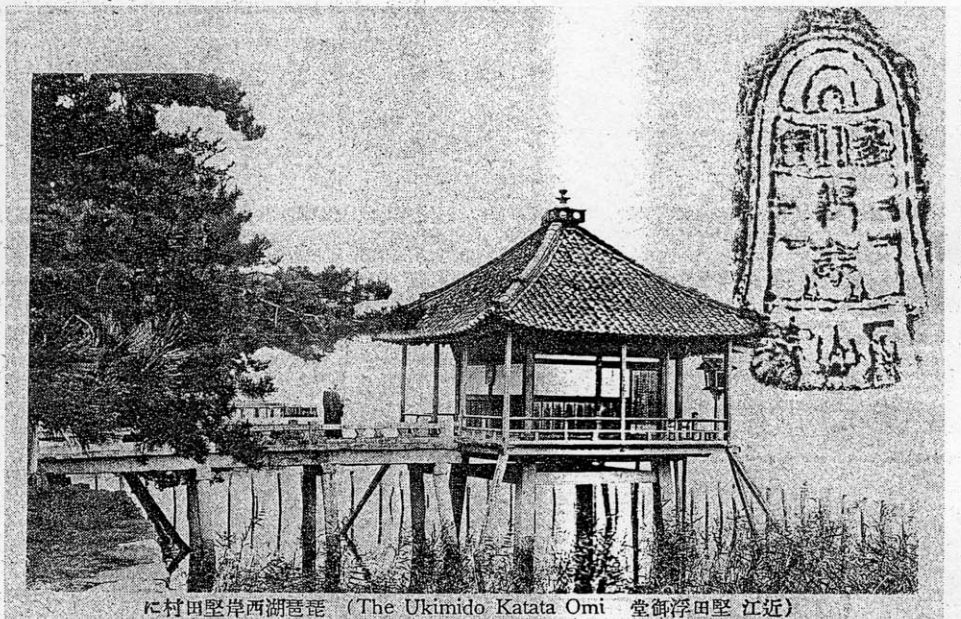
浮御堂は、湖岸に境内がひろがる海門山満月寺の仏閣の一つです。平安時代中頃の長徳年間(995~999年)

に、比叡山横山の恵心院にいた恵心僧都源信が、清らかな水や氷を想うことによって極楽浄土の地を想い、熟考する「水想観」の実践修行の場として建立したとされ、眼前に湖面がひろがるロケーションはその中でも欠くことのできない条件だったことでしょう。

また、源信自らが阿弥陀仏を千体彫ったとも伝えられています。阿弥陀如来は、西方浄土の教主とされ、『往生要集』をまとめ、極楽往生するために一心に念仏することと解いた源信は浄土教の祖とも言われています。

浮御堂

昭和9年に室戸台風によって倒壊した先代の浮御堂(絵はがき)



村田堅岸西湖琵琶 (The Ukimido Katata Omi 堂御浮田堅 江近) りあ名て以を臨落たまふ傳と建創の都僧心恵てし出突に上湖は宇堂りあ

祈願した灯台の役割を果たしていたとも考えられています。

満月寺の秘仏「聖観音座像」は、国の重要文化財になっています。

昭和56、57年度の発掘調査では、高さ5・5mの小さな白衣観音像が出土しました。

出土した観音像を包む龕の底には

本来は修行の場として建立された浮御堂ですが、琵琶湖の最狭部にあたり、中世には湖上権を掌握していた堅田にあったことから、湖上安全を

「観音真言一万巻を唱えつつ」この観音様を作ったとの墨書が残されています。観音菩薩は、阿弥陀如来の脇仏の1つであり、衆生を極楽浄土へ導

く「慈悲の仏」としてその信仰は広くひろがっています。ちなみに、浮御堂の周辺からは、改修に際して湖中に奉納したのではないかと考えられる釘や、参拝者が投入したと考えられる古銭、さらに、棧橋の橋脚跡も数多く見つかり、浮御堂が生活から切り離された存在ではなく、浄土信仰と共に身近な存在であったことがうかがえます。

明応9(1500)年に近江守護六角高頼に招かれた関白近衛政家が詠んだ八首の和歌に始まるとされる「近江八景」に「堅田の落雁」として取り上げられたその景観は、天保5(1834)年頃に当時の人気浮世絵師、安藤広重が錦絵「近江八景」を出版して人気を博し、今に繋がる景勝地・観光地としての地位を確立したと言えます。

平成20年度に国の登録記念物となった「堅田の落雁」の重要な構成要素である浮御堂は、平成21年度には、「浮御堂—堅田落雁と芭蕉—」として『近江水の宝』に選定されました。

極楽浄土想う「修行の場」

(財団法人滋賀県文化財保護協会 小竹森直子)